

日本疫学会 ニュースレター

平成22年4月15日発行 No.35

理事長退任にあたって

日本疫学会 前理事長
児玉 和紀



2010年1月9日・10日に開催された国際疫学会西太平洋地域会議兼第20回日本疫学会学術総会をもって、3年間にわたる日本疫学会理事長の務めを終えさせていただきました。この間に賜った会員の皆様のご支援ご協力に心より感謝を申し上げますとともに、この機会にこの3年を振り返ってみたいと思います。

ヨチヨチ歩きでスタート

思い起こせば、2007年1月に広島で私が学会長として開催した第17回日本疫学会学術総会の直後に、ともに国際疫学会（International Epidemiological Association：IEA）理事長を務められた青木國雄先生ならびにWalter W. Holland 先生、恩師である重松逸造先生、そして日本疫学会における先輩や若手の方々に激励会を開いていただき、理事長の務めを始めました。しかしそれは、諸先輩がここまで築き上げてこられた学会を維持・発展させていくことの重責に押しつぶされそうになりながらの、何をなすべきかを模索しながらの、そして不安だらけの、まさにヨチヨチ歩きでのスタートでした。

将来構想検討委員会の設立

理事長を拝命して最初の仕事は、こ

れまでの日本疫学会の歴史を振り返ったうえで、今後どのように発展していくべきかを検討することでした。そこで、理事の方々にお諮りして、将来構想検討委員会（委員長：辻一郎理事）を立ち上げさせていただきました。委員会は辻委員長を中心に、「わが国の疫学研究を飛躍的に発展させるための戦略を策定したうえで、その実現に向けた具体策を立案する」ことを目指して直ちに活動を開始し、5つの検討課題（疫学研究者の確保とスキルアップ

を図るための戦略、疫学研究の調査環境を改善するための戦略、臨床分野との連携を強化するための戦略、社会貢献・社会へのアピールを強化するための戦略、学会機能を強化するための戦略）を策定いたしました。

CONTENTS

理事長退任にあたって……児玉 和紀 1	学会報告
ごあいさつ……秋葉 澄伯 4	国際疫学会西太平洋地域学術会議 兼 第20回日本疫学会学術総会を終えて 三浦 直彦 12
新入会員	第15回「疫学の未来を語る若手の集い」の報告……小谷 和彦 13
質的研究から量的研究へ 新鞍 真理子 6	学会案内
疫学との出会い……池内 龍太郎 7	第21回日中韓産業保健学術集談会 15
佐野雄二先生を偲んで……青木 國雄 8	第32回国際がん登録協議会学術総会 (IACR2010) のご案内……15
コラム 新型インフルエンザ流行における疫学者の役割……尾島 俊之 9	第21回日本疫学会学術総会のご案内 15
日本疫学会奨励賞を受賞して わかりやすい形で危険因子のインパクトを示すこと……寶澤 篤10	委員会からのお知らせ
日本疫学会奨励賞受賞に当たっての回顧……松尾 恵太郎10	日本人類遺伝学会のGMRC制度が利用できるようになりました……16
ゲノム科学と疫学の接点 宮木 幸一11	Journal of Epidemiologyの掲載料徴収 16
	日本疫学会新役員決定……17
	事務局だより……18
	編集後記……18

いきなり統計法改正に遭遇

ところが、このような形で活動を始めていた矢先、いきなり統計法改正に遭遇することになりました。1947年に公布された統計法が60年ぶりに全面改正されることになり、2007年5月16日には改正統計法が国会で成立し、同23日には公布されるに至りました。この改正統計法では、公的統計の体系的かつ効率的な整備およびその有用性の確保を図ることを目指し、同時に統計調査対象者の秘密保護も強化されることになりました。しかし、これが社会医学系研究者にとって、大きな懸念を抱かせる改正になったことも否めませんでした。つまり、改正統計法第33条1項2号に記載されている「総務省令で定めるものを行う者」として、もし社会医学研究に従事する者が規定されないと、我々が人口動態統計などの政府諸統計を利用して行ってきた疫学研究ができなくなる可能性が出てきました。そこで、理事会にお諮りして日本疫学会として要望書を取りまとめ、7月24日には厚生労働省へ、8月2日には総務省へ提出いたしました。要望書の主な内容は、①改正統計法下においても引き続き社会医学研究に国の統計が利用できるように、第33条1項2号に記載されている「総務省令で定めるものを行う者」として社会医学研究に従事する者を規定する、②目的外使用申請における申請手続きを簡素化し、かつ申請期間を短縮する、③日本版 National Death Index (NDI) を創設する、④マイクロデータの公開など厚生統計の研究活用のさらなる促進を図る、の4点でした。この件に関しては、10月3日には社会医学系の4学会（日本衛生学会、日本産業衛生学会、日本公衆衛生学会、日本疫学会）合同で、さらに11月9日には日本医学会（会長：高久史磨先生）からも要望書が厚生労働省ならびに総務省に提出されました（この間の詳しい経緯等について

は、日本疫学会第31号の久道茂先生の記事をご参照ください。久道先生は日本医学会副会長のお一人で、この件では多大なご尽力を賜りました）。4学会合同要望書の取りまとめの際にご尽力をいただいた、森本兼曩日本衛生学会理事長（当時）、清水英佑日本産業衛生学会理事長（当時）ならびに實成文彦日本公衆衛生学会理事長に、この場をお借りして御礼申し上げます。なお、日本疫学会としてこのように迅速に行動できたのは、辻委員長を中心に将来構想検討委員会で既に関連課題の検討を始めていたからに他なりません。また、塚原太郎先生（当時は自治医科大学教授）に行政との連絡調整役を務めていただいたことも大きな要因になりました。

このような一連の活動の結果、社会医学研究者は引き続き公的統計が利用できるようになり、また目的外使用申請についても承認までの期間が大幅に短縮されるに至り、まずは一安心できることになりました。マイクロデータの公開などについても体制整備の動きが見られるようになり、また2009年12月には日本医学会社会部会内に「日本版CDC創設に関する作業部会」が設立され、日本版NDIの創設も夢物語でもなくなりつつあります。

苦勞しながらの活動でしたが、ある程度の成果をあげることができ、大変うれしく思っています。

将来構想検討委員会内に 4つの臨時委員会を設立

理事長就任早々に立ち上げた将来構想検討委員会は1年余の活動の結果、2008年3月に委員会内に4つの臨時委員会、つまり統計利用促進委員会、疫学研究支援委員会、学術委員会、広報委員会を設立するに至りました。

統計利用促進委員会（委員長：辻一郎理事）は、政府統計の利活用の促進やデータアーカイブ（調査研究データを寄託して、学術目的での利活用をオ

ープンにするための組織）の設立などを目指し活動しました。具体的には、改正統計法に詳しい方を招いて勉強会を開催するとか、厚生労働科学研究「死亡統計データベースの作成とその研究利用のあり方に関する研究班（主任研究者：安村誠司先生）」と連携して、日本版NDIの創設に向けた検討などを行いました。

疫学研究支援委員会（委員長：中村好一理事）は、疫学研究を企画している臨床研究者などを支援する活動を行いました。その目的は、臨床や保健の現場で疫学研究を実施したくても相談相手がいなくて苦勞している方々のニーズに応え、わが国の疫学研究や臨床疫学研究を推進することにあります。既にいくつかの研究に疫学会会員を共同研究者として紹介してきました。なお、この活動については、日本医学会からもご支援をいただいています。

学術委員会（委員長：中山健夫理事）は、学会機能の強化の一環として活動し、日本疫学会学術総会の折に学会長が決定するメインテーマと併せて、中長期的な展望で日本疫学会と会員にとって重要な課題を継続的に検討し、具体的な企画（いわゆる学術委員会・理事会企画）を提案し、その運営を行ってきました。この企画のパイロット的なものは第18回学術総会（東京、学会長：丸井英二先生）から既に開始していましたが、第19回学術総会（金沢、学会長：中川秀昭先生）からは本格的な企画・運営を行っています。

広報委員会（委員長：岡山明理事）は、日本疫学会の責務のひとつである「人々の健康と生命に直結する学問である疫学研究の成果を如何に社会に還元するか」について検討しました。健康に関わる社会問題が発生した際などには、世論を適切な方向へ誘導するとともに日本疫学会と疫学研究に対する社会的認知を高めるべく、その方策について議論を続けました。

これらの活動は以下に述べる

Journal of Epidemiology (JE) の発行ともあわせて、社会医学系学会としての社会貢献ともみなされます。2009年10月23日に奈良にて開催された第68回日本公衆衛生学会総会（学会長：車谷典男先生）でのシンポジウム「社会医学系学会は社会にどのような貢献をするべきか（座長：中村好一理事、宇田英典先生）」において、辻一郎将来構想検討委員会委員長から「日本疫学会の社会貢献」と題して詳しい活動報告がなされました。

Journal of Epidemiology の発展

Journal of Epidemiology (JE) もこの3年間に大きく発展を遂げました。JE編集委員会（委員長：中村好一理事、この2年間は祖父江友孝理事）メンバーの献身により、論文受理から採否決定までの迅速化が図られ、今では平均して19日に短縮されています。またオンライン投稿システムも導入され、英文校正もしっかりしたものになりました。論文数も増加して年6回の発行も定着し、インパクトファクターも2008年には1.642となって、これは国内雑誌のなかでは29番目、社会医学系雑誌ではトップになりました。学会誌は学会の顔でありシンボルであります。今後も、アジア諸国を中心にカバーする国際学術雑誌として、JEのさらなる発展が期待できます。

ニュースレターも充実

日本疫学会ニュースレター（編集委員長：尾島俊之先生）も編集委員の方々の奮闘で充実が図られ、読み応えのあるものになっています。会員の方々への情報伝達の機能を見事に果たしており、学会ニュースレターのお手本になっていると思っております。

会員の方々への情報伝達を迅速に行うにはニュースレターの年2回発行では不十分なため、前々理事長の吉村健清先生がお始めになったメールを使った疫学会通信も充実させ活用いたしま

した。2007年に6回、2008年には20回、2009年にも20回と3年間に合計46回送付しました。事務局は大変でしたが、十分機能したと思っています。

他にもいくつかの成果が

その他にもいくつかの成果がありました。

その中で特筆すべきことは会員数の増加です。2006年には1,420人でしたが、2009年には1,532人となり、念願であった1,500人を超えました。

疫学辞典第5版の翻訳にも取り掛かっています。多数の疫学会会員のご協力のもとに翻訳作業ならびに校正はほぼ完了し、近々出版される運びになりました。この翻訳には中村好一理事に中心的に関わっていただき、また柳川洋先生と重松逸造先生にも多くの時間を割いていただいご校閲をいただきました。

日本疫学会としての国際的活動も目指したもののひとつでした。2007年タスマニアで開催された国際疫学会西太平洋地域会議に私が日本疫学会理事長として招待され、特別講演をいたしました。また2010年1月には第20回日本疫学会学術総会（学会長：三浦宜彦理事）に合わせて、日本では4回目となる国際疫学会西太平洋地域会議を埼玉にて開催していただきました。2008年にブラジルのポートアレグレで開催されたIEAのWorld Congress of Epidemiology (WCE) にも多数の日本疫学会会員が参加し、日本疫学会の存在を誇示してくださいました。日本疫学会と韓国疫学会の交流事業である日韓疫学セミナーも2007年11月にはソウルで、2010年1月には埼玉で開催され、両疫学会の交流を深めることができました。

若い方々に期待

このようにいくつかの成果はあげることができましたが、やり残したこともいくつかあります。その最大のものは学会事務局固定化です。現在事務局

を理事長の下にしていますが、その運営は想像以上に大変です。本来、学会理事長はなっていたきたい方をお願いすべきで、事務局を引き受けられる方にしかお願いできないという状況は間違っても作るべきでないと考えます。しかし、それなりの努力はいたしました。残念ながら私の任期中に事務局固定化を成し遂げることができませんでした。これはいわば公約違反ですので、会員の皆様には心よりお詫び申し上げます。今後できるだけ近い将来に事務局固定化が達成されるよう願っています。

World Congress of Epidemiology (WCE) の日本での開催も目指したことのひとつでした。日本では1996年に青木國雄先生が名古屋で開催されましたが、それから既に十数年も経っています。日本で2度目となるWCEの開催は私の夢でした。ただ、幸いなことに2017年の日本開催を目指して現在IEAのCouncilorである中村好一理事を中心に誘致活動を行うことが決まり、日本疫学会からも全面支持をいただけることになりました。日本疫学会会員の方々も国際疫学会会員になっていただき、2011年8月のEdinburghでのWCEに参加して日本に投票していただけたらと願っています。

日本疫学会は比較的若い学会です。会員にも若い方が多く、今は49歳までの方が約6割を占めている状況です。学会の将来は若い方々の力にかかっています。日本疫学会では「疫学の未来を語る若手の会」で将来を見据えた意見交換が活発になされており、そこには有望な若手研究者が多数参加されています。日本疫学会の将来はこの方々に託したいと思います。

おわりに

以上長々と書きましたが、多くの方々に支えていただいでどうにか3年の任期を終えることができました。理事の方々、特に担当理事の方々には本

当にお世話になりました。また、繰り返しになりますが、会員の皆様から賜ったご支援には心から感謝いたしてお

ります。

今後は一会員の立場から、日本疫学会のさらなる発展の様子を見守らせて

いただきます。

どうもありがとうございました。

ごあいさつ

日本疫学会理事長
秋葉 澄伯

初めに

先日の総会で理事長に選任されました。大役を仰せつかり、身が引き締まる思いをしております。幸い、理事・監事の皆さんは大変有能な方ばかりですので、皆さんに助けをいただきながら、評議員や会員の皆様のお力もお借りして、日本疫学会が直面する懸案事項に取り組んでいきますとともに、少しでも日本疫学会の発展と、疫学の発展に貢献できればと考えております。

以下、日本疫学会が直面する懸案事項等をご説明し、私の考えを述べさせていただいて、理事長就任のご挨拶に代えさせていただきたいと考えております。

JEの運営・出版に関して

本ニュースレターで祖父江編集委員長が述べておられますように、Journal of Epidemiologyの投稿件数は順調に増加しており、2009年度は229編（国内113編、海外116編）のご投稿をいただきました。2010年にはさらに投稿数・掲載数が増えるものと予想しております。JEが質量ともに発展することは、私ども日本疫学会にとって嬉しい限りです。しかし、一方で、掲載論文数の増加は英文校正費や印刷費など経費の増加にもつながっております。学会の金銭的負担を軽減するため、去る1月10日の第20回日本疫学会会務総会で決定していただきましたのが、

掲載料の徴収です。掲載料の内容に関してはホームページ（HP）にもお示ししてありますので、ご一読ください。会員の皆様にはご理解・ご協力のほど、宜しくお願い申し上げます。今回の措置で学会の負担がどの程度軽減されるかによりますが、今後、JEの印刷・郵送をやめてpdfだけにするか、非会員のpdfダウンロードを制限するか、JEの出版を出版社に任せるかなどの措置を取る必要が出てくる可能性もあります。この点に関しましては、会員の皆様のお考えを聞かせていただきながら慎重に検討を進めたいと考えております。

事務局の固定化

事務局の固定化に関して児玉前理事長を中心に検討が行われてまいりました。（財）日本公衆衛生協会にお願いする案などが検討されましたが、現時点では、実現の見通しが立っておりません。本会計年度から事務局が私のところに移りましたので、事務量の程度を把握した上で、他の学会・研究会などの状況なども勉強させていただきながら、今後、どのような形で事務局を運営するのが良いかを検討し、3年以内に結論を出したいと考えております。

20周年記念事業WG

日本疫学会は2011年1月に設立20周年を迎えます。去る1月の会務総会で、これを記念した事業を2011年の学術総



会（会長：森満 札幌医科大学医学部公衆衛生学講座教授）の期間中に行うことをお認めいただきましたので、森会長ともご相談し、講演会かシンポジウムを開催したいと考えております。

我が国には世界に誇るべき疫学調査・研究が多数あります。設立20周年の節目に、これらの疫学研究の歴史を現役・次世代の研究者に伝え、さらに国内外に情報発信することを主な目的とした事業を行ってはどうかと考えております。具体的には、斯界の権威ともいべき先生方へお願いし、ご自分の研究テーマ（がん、循環器、その他）に関して我が国での研究の歴史・現状と成果、将来展望などを英文総説としてお書きいただき（日本語でお書きいただいた場合は英語に翻訳させていただいた上で）、JEのSupplementなどとして出版することなどを考えております。

奨励賞選考

若手研究者を育てることが重要であることは多言を要しません。疫学会の理事は地域を代表するように選ばれておりますが、現在は北陸、信越、四国、沖縄などの地方からは選ばれておりま

せん。理事が出ていない地域で頑張っておられる若手研究者を発掘するためにも、奨励賞選考委員を現在よりも多くの地域から選出するようにしたいと考えております。

ニュースレター

一部の研究会、学会では、ニュースレターを郵送せず、pdfを電子メールで送付しているところもあります。また、疫学会のニュースレターもHPに掲載するだけに止めていた時期がありました。去る1月の総会で、このニュースレターを最後に、郵送を中止することが認められました。これもJEの運営・出版に関する経費増加に対処するための措置であります。会員の皆様のご理解をいただければと思います。なお、今後はニュースレターをHPに掲載しますとともに、電子メールアドレスの登録をされている方には、疫学会通信にてニュースレター発行とリンク先をお知らせします。

広報

広報委員会などで、会員増加（特に臨床系の研究者、循環器疾患の疫学者）のための広報活動の強化、一般市民を対象にした活動（提言、アピール）、他学会等との連携（がん予防、がん登録、循環器疾患の学会・研究会）、HPの内容の充実などを検討していきたいと考えます。

疫学セミナー

去る1月の学術集会の前日に開催されました疫学セミナーは、三浦会長、西事務局長のご努力と皆様のご協力のお陰で、多数の方が参加され熱心な議

論が行われました。疫学セミナーは疫学会の会員以外も対象にしており、会員増加の観点からも重要な意義を持つと考えます。今後は、疫学セミナーと同様のセミナーを学術集会とは別の時期に、例えばサマーセミナーなどとして、開催してはどうかと思います。仮に実施するとしても、当面は、比較的多数の参加者が見込める関東・関西地域などでの開催になると思いますが、それ以外の地域での開催も含め、検討すべき課題と考えています。

会費

現在、一般会員の年会費は9,000円です。他の学会と比べ格段に高くはないとはいえ、大学院生や若手研究者にとっては小さな負担ではありません。現在は、JEに関する経費増加などもあり、会費値下げを直ちに実行できる状況にはありませんが、大学院生・若手研究者の会費値下げは、若手の会員数拡大の観点からも重要な検討課題です。私の任期中に値下げするとはお約束できませんが、なるべく早く実現できるように努力したいと思います。

国際疫学会

国際疫学会のWorld Congress of Epidemiologyは3年に一度開催されます。今回は2008年でブラジルのPorto Alegreで開催されました。次回はEdinburghで7-11th August 2011に開催されます。2014年はアンカレッジで開催されることが決まっていますが、2017年の開催はEdinburghで開催されるbusiness meetingで決まるとのことです。我が国では、青木國雄先生が1996年に開催されました。2017年の

World Congress of Epidemiologyには中村好一理事が立候補の準備を進めておられます。今後、日本疫学会と世界の、特にアジア地域の疫学者との交流をさらに深め、中村先生を応援したいと考えております。この点に関しましても、会員の皆様のご協力を賜りましょう、宜しくお願い申し上げます。

なお、ここでは、International Epidemiological Association (IEA)を「国際疫学会」と呼ばせていただきましたが、IEAの日本語呼称に関して、疫学会ニュースレター34号に児玉先生がお考えを述べておられます。児玉先生は、ニュースレターのなかで、「日本疫学会では最初の約10年間は「国際疫学会」が、以後の約10年間では「国際疫学会」が一般的に使用されてきたこととなります。」と指摘された上で、「日本疫学会理事長としては、今回の疫学辞典第5版の翻訳出版を契機として、以後は当面の間はIEAの呼称としては「国際疫学会」とすることを会員の皆様に提案させていただこうと思います」と述べておられます。私も児玉先生のご提案に従い、国際疫学会と呼びさせていただきました。

最後になりましたが、児玉前理事長の3年間のご功績に敬意を表しますとともに、リーダーシップに感謝申し上げます。また、西先生をはじめ前事務局の皆様のご努力に感謝いたします。なお、1月から、私どもが事務局の仕事を引き継いでおりますが、慣れない仕事で皆様にご迷惑をおかけすることもあろうかと思いますが、ご容赦いただきますようお願い申し上げます。



質的研究から量的研究へ

富山大学大学院 医学薬学研究部 老年看護学講座 准教授
新鞍 真理子



皆様に初めて御挨拶をさせていただきます富山大学の新鞍真理子（にいくらまりこ）と申します。このたび、日本疫学会に入会させていただき大変嬉しく思っております。また、このような紹介の機会を与えていただき感謝申し上げます。

個人をとらえる視点

私は、看護教育に携わるまでの約20年間、病院での臨床看護と老人福祉施設での相談業務を行っていました。個人を対象とした援助では、対象者の問題を解決するために、対象者について理解を深め、その人に最も適した個別的方法で援助を提供することが求められます。このような実践活動の中では、援助に役立つ理論の構築が重視されます。そして、私は個人の内面をより深くとらえ、周囲の環境と関係のあり方を把握し分析する質的研究に取り組みました。

質的研究は、Evidence Based Medicine (EBM: 科学的根拠に基づく医療) に対する Narrative Based Medicine (NBM: 語りと対話に基づく医療) といわれる部分の研究です。質的研究は、NBM で用いられる対話分析や事例研究のほか、グランデッドセオリーやエスノグラフィなどの研究方法があります。質的研究の多くは、人間が経験している現象を分析し、その現象の意味を明らかにすることを目的としています。私は当時、質的研究しか眼中にありませんでした。

疫学との出会い— 集団をとらえる視点へ

2001年4月より、当時の富山医科薬

科大学（現 富山大学）医学部看護学科の地域・老人看護学講座に老年看護学担当の講師として着任しました。この講座は、地域看護学と老年看護学の教員7名で構成されていました。初めて量的研究に参加したのは、当時、講座の長であられた成瀬優知教授を中心とした住民の健康に関する意識調査でした。調査票の作成、エクセルでのデータ入力、SPSSでの解析、すべてが初めての経験でした。質的研究からのカルチャーショックは多少ありましたが、量的研究という異文化に触れワクワクしたことを覚えています。疫学の方法を用いて、集団をとらえる視点を学びました。

その後、調査票を用いた横断研究を何度か実施しました。エクセルやSPSSで扱うケース数が、100から200になり、300、500、1,000、20,000と徐々に増えていきました。介護保険データを分析した時、初めて縦断研究を行いました。これが、疫学的な研究を行った最初だと思います。質的研究の時は、対象者が話した言葉の文字を見つめて、この背後にどんな思いがあるのか？行間には何が隠されているのか？と問いながらデータと対峙していました。量的研究では、数字をじっと見つめて、この数字が持つ意味は何か？この数字は何を訴えているのか？と問いながらデータや解析結果と対峙しています。

ここ数年、介護保険データの分析を続けています。先日、埼玉県立大学で開催された国際疫学会西太平洋地域学術会議 兼 第20回日本疫学会学術総会に参加させていただきました。シンポジウム「ヘルスサービス研究」におい

て、疫学研究では地区診断によるリスクファクターの抽出が目的であり、ヘルスサービス研究ではサービス効果を評価することが目的であるという議論が印象的でした。介護保険データを用いた研究では、疫学的な分析と介護サービス効果を評価するための分析が行われています。しかし、この2種類の分析が十分リンクされておらず別々の研究として行われており、これらを統合した形で研究を進めることが必要ではないかと感じています。

疫学への期待

老年看護学は、1990年に成人看護学から独立した新しい領域です。老年看護学は、母体である成人看護学の流れを汲む部分では臨床疫学が必要であり、高齢社会対策を目指し独立した経緯を考えると地域保健領域の疫学が必要です。これからの老年看護学においては、これまでの個人をとらえる視点だけではなく、集団を対象とした実態把握や課題分析が必要であり、疫学の視点と方法論が不可欠です。

また、看護学全体では、最近、1つの研究の中に量的研究と質的研究をミックスして用いるトライアングレーションアプローチ (Concurrent Triangulation Approach) が注目されています。適切な量的研究が少ない今日の看護研究において、このような方法を用いる場合は、特に量的研究と質

的研究のルールを正しく認識し使い分けることが必要です。

私は、看護学において量的研究を適

切に行うためには、疫学の視点や方法論を正しく理解することが重要である

と考えます。疫学の基本的なことを学

び研鑽を積みたいと思っています。

■プロフィール

1980年看護師免許取得後、病院、特別養護老人ホーム、在宅介護支援センターに勤務。2001年4月より看護教育

に従事。看護学修士、社会福祉学修士。現在、桜美林大学大学院老年学研究科博士後期課程在学中。

疫学との出会い

北里大学大学院医療系研究科 博士課程
池内 龍太郎

この度、日本疫学会に入会させていただくことになりました、北里大学大学院医療系研究科・衛生学公衆衛生学・博士課程2年の池内龍太郎と申します。この様な紹介の機会を与えていただき感謝いたします。

私と疫学との出会いは、現在の指導教授である相澤好治先生に出会ったことです。しかし、それ以前にも疫学や公衆衛生を意識したきっかけとなることがあります。私は、子供のころから理由が分からないと、納得するまで「なんで?なんで?」と考えてしまう性格なのですが、その謎のひとつに食品広告で示されるデータがありました。食品やサプリメントの広告には、いろいろなデータやグラフが大きく載せられ、論文のような体裁をしたものもあり、説得力のあるものが少なくありませんでした。鵜呑みにはしなくても、よく読むと、十分な人数に対してしっかり研究をしてデータを出しているように見えますし、高校生のときは私は「これは効きそうだな」と感心していました。また「どうしてこんなに効くのなら薬に応用しないのか、むしろこの食品を病院で仕入れて今病気で苦しんでいる人にあげればよいのに」とも思っていました。周りは「インチキに決まってる!」と一刀両断でしたが、

一番知りたかった「なぜあんなにはっきり結果が出ているのに信用できないのか?」という問いの答えはありませんでした。そのことに結論が出たのは、医学部公衆衛生学の授業中のある先生の話でした。もっともらしく見えるデータでも、本当に正しいことを示しているかを理解するには研究のデザインや統計学に対する知識が必要、というものでした。他にもいろいろ疫学や公衆衛生についてのお話をされましたが、この「もっともらしいデータの話」は特に興味深く、漠然とこの分野を勉強したいと思ったのもこの時でした。

その後、研修医の間に、いろいろな論文を読む度に上記の話を思い出し、また尊敬する循環器内科の先生の「これからは予防の時代だ!」という言葉に大変感銘を受け、これからはぜひエビデンスを正確に理解するために疫学の勉強をしたい、と考えるようになり、母校である北里大学衛生学公衆衛生学の門をたたきました。そこで相澤教授から、集団を対象とする医学である衛生学公衆衛生学の重要性と、保健政策に対する正しい疫学的知識の役割をご教示いただき、自分も将来は大きな集団の健康増進に寄与する仕事がしたいと強く思いました。また教室員の先生方の温かいご指導を受け、疫学がおも



しろいものであることも知りました。そのような流れの中で今回、疫学についてさらに詳しく学び、今後少しでも疫学の発展の一助となれる日が来ればと思い、日本疫学会に入会させていただきました。

大学院に入学してからは、よい結果の裏には地道な作業が多いということを知り、大変さも知りましたが、教室員の先生方を含めいろいろな方に助けていただき、まさに人と人とのつながりや信頼でエビデンスはよりよいものになることを実感する毎日です。最近では疫学に加えて実験についても精通している諸先生方の姿を見るにつけて、自分も実験を経験し、実際の実験系の視点を得たうえで疫学をやりたいと考え、衛生学公衆衛生学の実験系を勉強させていただいております。現在行っている研究は、トリブチルスズやフッ素の毒性に関するものですが、結果の解析に疫学的な手法を用いることは言うまでもありません。他にもやりたいと思っていることは、大規模自然災害

に対する公衆衛生学的アプローチです。自然災害時のデータを疫学的に正しく評価し、今後発生しうる新たな災害に対してリスクマネジメントをいかに行うべきかを、少しでも明らかにできればと夢を持っています。災害後の被災地では、個人に対する救急医療対応に加えて、地域や社会全体に対するアプローチ、たとえば感染症などの予防、社会福祉、衛生の問題など、やらなければならないことが多くあります。しかし、限られた人的・物的資源

の中でどのように効率よく医療を組み立てるかというのはいまだ研究の余地があり、大変魅力的なテーマであると感じています。まだまだ実力が追いつきませんが、いつかきっと夢を実現するべくこれからも研究に勉強に精進したいと思います。

これからも「より正確な疫学的手法をもって集団の健康増進に寄与する」という理念を持って、少しでも研究の質をあげ有意義なものにするべく、努力を継続していきたいと思っています。ご

指導の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。



■プロフィール

北里大学医学部卒業後、同大学病院で研修し、同大学院医療系研究科衛生学公衆衛生学へ入学、現在に至る。

趣味は食べることと飲むことですが、自然が好きなので時間を見つけては海に行き潜ったり山を歩いたりしています。

佐野雄二先生を偲んで

日本疫学会名誉会員
青木 國雄

日本疫学会ニュースレターで佐野雄二先生のご訃報に接した時は、間違いではないかと目を疑った。既に中村好一教授と児玉前理事長の甲文があり、筆者ごとき世代の異なる老人の出る幕ではないが、あえてこの文を投稿させていただく。

日英疫学セミナーは我が国の乏しい疫学卒業後教育を充実させる一方法として重松逸造先生、柳川洋先生が発案され、英国のホランド先生にご協力をお願いして始めたもので、若い研究者に好評で続けられたものである。ただ短時間に濃い内容をこなさねばならず、事務方は恐ろしいほど多忙であった。セミナーでは、間断なく事務処理に駆け回っておられる長身の方が目に付いた。お聞きすると、内科から衛生行政へ転向された佐野先生と分かり、なるほど、センスも、行動傾向も違うわけかと思い、新しい風を吹き込んで

くださると期待していた。後に井形昭弘元鹿児島大学学長から私の弟子ですのでよろしくと言われ、また納得したものであった。筆者とはまもなく、医学随筆について意見をいただき、それがご縁で意見交換が始まり、先生が医学史に関心を持っておられたので文通が激しくなった。

その後筆者は日本医事新報の「緑陰随筆」に、ドイツ・ベルリンのライデン教授が明治40年代に、日本でも癌学会を組織し、新しく発足する国際がん会議に参加して欲しいという呼びかけをされたエピソードを投稿した。しかしライデン教授の経歴は全く見つからず、「緑陰随筆」で先生のご略歴、日本人弟子などについて教示を呼びかけた。UICCの理事、ドイツ・ハイデルベルグ大学癌研究所長、ツール・ハウゼン教授（2009年ノーベル賞受賞）からは、ライデン教授の伝記はドイツで

も見当たらない。たまたまハイデルベルグの研究所年報にある簡単な略歴と写真があると親切にも送っていただいた。ライデン教授はハイデルベルグにも勤務されていた。その後、佐野先生からインターネットでライデン教授の経歴、業績と顔写真が見つかったと、コピーを送ってくださったのには恐縮した。わざわざ探してくださったのである。結果として、ライデン教授は当時の欧州の内科学会の重鎮であり、多くの業績とともに、がんの集団検診も当時始められていたとのことである。しかし日本人弟子の消息は分からなかった。

佐野先生も筆者もローベルト・コッホ先生には関心が強かった。筆者がコッホ先生来日時、名古屋での盛大な歓迎会と記念写真のコピーをお送りしたところ、暫くして、ベルリンのコッホ研究所で撮影された写真とか、「コッホ博物館」「コッホ邸跡」、バーデンバーデンの「コッホ終焉のサナトリウム」などの資料と、北里研究所発行の「コッホ来日の東京のスケジュールと講演

会の内容の抄録」、これは日本細菌学会臨時増刊号で、文87頁と写真4枚、英文講演抄録40頁、を含む大部のものであった。また北里先生が、ハナという家政婦兼秘書を雇い在日中のコッホ先生夫妻の世話をさせ、さらに欧州までハナを派遣したこと、ハナはコッホ先生が亡くなられるまで、面倒を見て帰国したというエピソードを教示された。ベルリンのコッホ研究所では、来日時に名古屋市医師会から贈呈された七宝焼きの花瓶と鯨デザインのブロンズ花瓶をみつけられ、その写真も筆者に示された。この写真を筆者は近著の「予防医学という青い鳥」に掲載させ

ていただいた。そのお礼も申し上げる時間がなかったのは残念であった。

佐野先生のお人柄については既に弔文に尽くされているが、一方、このように探究心が強く、納得のゆくまでつきめられる実行力をそなえ、研究と公衆衛生実践に広い範囲で活躍されていたわけである。

先生は徳島県庁で予防医学、公衆衛生学の一般向けの随筆を、何年かにわたり、67編も掲載されておられたことが奥様からのお便りで分かった。どの内容も、多くの文献に裏づけられたもので、医学界の有名な学者のエピソードを紹介しながら、最近の予防医学情

報を、ユーモアを交えて書いておられ、ユニークであり、コ・メヂカルにも理解しやすい記述であり、これにも感じいった次第である。

生前の温顔は目前にあり、はにかみながらも、時にきつとして明確に反論されたお姿が懐かしい。突然、疫学会という舞台に現れ、多くの話題を残され、ふっと姿を消された。惜しい人物を失ったものである。私どもに夢を与えてくださって本当に有難く感謝のほかはない。心からご冥福をお祈り申し上げます。 平成22年正月

コラム

新型インフルエンザ流行における疫学者の役割

浜松医科大学健康社会医学講座教授 尾島 俊之

昨年春から新型インフルエンザの流行が世界を襲いました。縁あって、厚生労働科学研究（特別研究事業）「新型インフルエンザA (H1N1) への公衆衛生対応に関する評価及び提言に関する研究」を担当しました。この研究では、都道府県等の本庁、保健所、市町村、そして学校等への調査を行い、研究班内での検討を行いました。そして、今後の新型インフルエンザ対策として、状況に応じて柔軟な運用が行いやすい行動計画策定等の備え、種々の関係者間及び国民とのコミュニケーションの強化、感染症対応に関する人材力の強化などが重要であるという考察を行いました（研究班ホームページ <http://influ.umin.jp>）。この経験から疫学者の役割について考えてみたいと思います。

今回の流行で、国の意思決定や情報分析において、国立感染症研究所を中心とした何人か以外には、疫学者が関

わるのが余り多くなかったと思われる。この危機に際して、疫学者が貢献すべきことがいろいろあったのではないのでしょうか。現在、日本疫学会で、感染症の疫学に強い会員は余り多くない状況がありますので、その人数を増やす必要があると考えられます。また、その専門知識が速やかに社会に貢献できるためには、日頃から疫学者と政策決定者との信頼関係や情報交換のルートが構築されている必要があると思いました。一方で、今後、国に対しては、感染症サーベイランス等について二次的な疫学分析に使用できるような年齢・地域別等の詳細なデータの公表、さらに一定の守秘義務等を課した上での生データの提供が行われる体制を期待したいと思います。

今回のような危機管理においては、指揮命令系統、インシデントコマンドシステムの確立が重要でして、船頭が多い状態は避けなければなりません。

一方で、国等の意思決定者は適切な情報と分析によって判断を行う必要があります。その場合、単に医学・公衆衛生的側面だけではなく、経済損失や、リスクコミュニケーションの視点からの判断も重要です。各分野の専門家がそれぞれ意思決定者に進言するだけではなく、分野を超えた専門家同士の議論も重要だと思います。

今回の流行前に国が策定した行動計画では、地域によって流行の進展が異なることを想定し、まん延期の宣言は都道府県知事が行うことになっていました。しかしながら、実際には、まん延期の宣言を行った都道府県はありませんでした。また、地方の状況に応じて、主体的な判断に基づききちんと対応が行えた都道府県は多くなかったと考えられます。各都道府県等が、それぞれでの分析、判断能力を持つことができるように、疫学者は日頃から地方の人材育成や、また危機時の支援を行う必要があると思いました。

将来、また新しい感染症等の流行が起こった場合には、疫学者がより社会に貢献できるようにしようではありませんか。

日本疫学会功労賞および奨励賞の贈呈

第20回日本疫学会学術総会において、下記の通り、平成21年度日本疫学会功労賞および奨励賞の贈呈が行われました（五十音順、敬称略）。奨励賞を受賞された寶澤篤先生、松尾恵太郎先生、宮木幸一先生に受賞の喜びや今後の抱負について寄稿いただきました。

功労賞：中川秀昭（第19回日本疫学会学術総会学会長）

奨励賞：寶澤 篤「循環器疾患危険因子の寄与危険度割合の検討」

松尾恵太郎「分子疫学的アプローチによる

がんリスクに対する生活習慣の意義の検討」

宮木幸一「ホモシステイン代謝酵素の遺伝子多型と

動脈硬化に関する分子疫学研究」

日本疫学会奨励賞を受賞して

わかりやすい形で危険因子のインパクトを示すこと

東北大学大学院医学系研究科公衆衛生学分野 寶澤 篤

このたび「循環器疾患危険因子の寄与危険度割合の検討」に関しまして栄えある日本疫学会の奨励賞を受賞させていただくことができました。理事長の児玉和紀先生、学会長の三浦宜彦先生はじめ関係諸先生方に深く感謝申し上げます。

私が疫学研究に足を踏み入れるきっかけとなりましたのは、初期研修を救命センターのある病院で受け、その際に「重症患者の初期治療は重要であるが、それよりも予防の方が重要ではないか」と考えたことでした。そのことを当時東北大学第2内科の今井潤先生にご相談し、そのご紹介で久道茂教授の下で勉強を始めることができました。統計学、疫学についての知識は皆無な状態からのスタートでしたが、久道先生、辻先生をはじめとするスタッ

フの皆様の温かく、時には厳しいご指導のおかげをもちまして徐々に疫学のものの考え方を身につけさせていただきました。東北大学公衆衛生学分野の関係者では日本疫学会奨励賞を受賞したのは深尾彰山形大学教授をはじめとして私で7人目となります。このような優れた教育システムのある教室で疫学研究を始めることができたことは本当に幸せであったと感じております。

さて今回受賞させていただいた人口寄与危険度割合は相対危険度と有病率を組み合わせるという単純な指標ではありますが、その危険因子のインパクトをわかりやすい形で示す重要な指標であると感じています。ただし有病率の視点が入るため、研究対象の代表性が問われる指標でもあります。そういった意味からも、住民の参加率の非常

に高い大崎コホートや上島弘嗣先生にお声がけいただいて滋賀医科大学の研究グループに参加し、NIPPON DATAをはじめとする我が国を代表するコホートについて様々な分析をする機会を与えていただき、種々の危険因子の寄与危険度割合について検討ができたことは望外の幸せでした。

また、人口寄与危険度割合という指標は有病率の変化に伴い推移していきます。特に男性で肥満者が増えてきている現在、疾病構造が変化していくことが予想され、人口寄与危険度割合の推移について今後も検討を続けていく必要があると考えています。

今後は人口寄与危険度割合の高い危険因子に対する介入を検討していきたいと考えています。たとえば高血圧に関しましては、健診受診率もそれほど高くなく、また高血圧を指摘されても治療の開始に結びついている人は少なく、さらに病院に受診している人でも血圧コントロール状況が必ずしも良好ではないことがわかっています。そこで、健診受診者を増やしていくこと、続いて高血圧を指摘された人を生活習慣の変容・医療機関への受診に適切に結び付けていくことが重要ではないかと考えております。

最後に、私が受賞することができたのは、これまでご指導賜りました久道茂先生・辻一郎先生・上島弘嗣先生をはじめとした諸先生方、そして常日頃から私をサポートしてくれている教室スタッフの皆様のおかげであります。この場を借りて改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

日本疫学会奨励賞を受賞して

日本疫学会奨励賞受賞に当たっての回顧

愛知県がんセンター研究所 疫学・予防部 松尾 恵太郎

この度、日本疫学会奨励賞という栄誉ある賞を受ける機会をいただきました。この場を借りて、児玉前理事長、

選考委員の諸先生をはじめ、関係各位に心より御礼を申し上げます。

このような場をいただきましたが、

研究内容に関しては受賞講演でお話しいたしましたので、この場では私が疫学研究者として生きていくことを決意するに至った最初の経緯を簡単に振り返ってみたいと思います。

振り返るに、血液内科医を志す新米医師に過ぎなかった私が、疫学研究を志すに至ったのは偶然のたまものだった

たと思います。

私は、卒業研修を亀田総合病院で行いました。平成8年当時、evidence-based medicineという言葉が流行りはじめた頃でした。実地臨床の中で、「何故この治療をしたのか、に関して医師は根拠を持たなければならない」という雰囲気のレジデントの先輩、同輩に囲まれながら、またそれとは全く乖離した意識で臨床に取り組んでいる指導医クラスの先生との狭間で、刺激に満ちた日々を過ごしました。自分の受持ち患者に関連するエビデンスを捜す中で、数多くの「日本のエビデンスが殆どない」という事例にぶつかりました。エビデンスの消費者のみならず、生産者にもなりたい、という淡いあこがれを抱くようになり、その後疫学という部門に移る上で、目立たないながらも強力な影響があったと振り返って思います。

その後、思いもかけず、疫学に直接携わることになりました。平成12年、臨床医局の指導教授であった原田実根先生（岡山大学第二内科）が浜島信之先生の求めに応じて、私を愛知県がんセンター疫学部へ派遣したことに始まります。何を考えて派遣されたのか、私には今もってよく分かりません。ただ、医局の人々から「医者をやめるのか」と、さんざん言われ内心傷ついたのを覚えています。実際、診療生活か



右から功労賞を受賞された中川秀昭先生、奨励賞を受賞された賈澤篤先生、松尾恵太郎先生、宮木幸一先生

ら、突然オフィスに座ることが主体の生活になったのはかなりの違和感がありました。臨床根性の抜けない私は、当初、罹患リスク要因探索の研究に距離感を感じ、心中、臨床系研究の方を主体に考えていました。その傍ら、浜島先生の指導の下で、分子疫学研究に数多く携わる機会を得ました。多くの研究に携わる中で、臨床における生存要因探索も、疫学における罹患要因探索も、「疫学」という観点から同じである、ということに気づきました。当時、臨床と非臨床の間の壁は私の中では高く、こんな当たり前のことに気づくのに、手間取りました。「臨床、非臨床にかかわらず人に適応するエビデ

ンスを作るには疫学が必須であり、自分はそれをやるべきである」と決意し、ハーバード公衆衛生大学院へ留学、その後の選択をして今に至ります。

今現在疫学研究者として働いていられることを、とてもうれしく、有り難く思っています。これからもこの気持ちを大切に疫学研究に打ち込んでいきたいと思っています。また、同じ道を志す仲間が少しでも増えるよう取り組んでいきたいと思っています。

最後に改めて、これまでに様々な形で叱咤激励をくださった方々に御礼を申し上げます。

日本疫学会奨励賞を受賞して

ゲノム科学と疫学の接点

国立国際医療センター 医療情報解析研究部ゲノム疫学研究室長 宮木 幸一

このたび「ホモシステイン代謝酵素の遺伝子多型と動脈硬化に関する分子疫学研究」に関して、日本疫学会奨励賞という大変名誉ある賞をいただき、学会前理事長の児玉和紀先生、学会長の三浦宜彦先生をはじめ関係諸先生方に心から感謝いたします。

私にとって疫学は「より良い意思決

定に必要不可欠な学問」であり、研究領域を問わず得られたデータからどのような推論ができるか、それがどの程度確からしいかを適切に評価していく上で、なくてはならない考え方の基礎を提供するものだと思っています。

今回の受賞では、動脈硬化予防の観点から生活習慣と遺伝素因の相互作用

を明らかにしてきたいくつかのゲノム疫学研究を評価いただきましたが、ゲノム科学においても扱う遺伝子データ量が膨大になればなるほど、そして玉石混淆の遺伝子解析を含んだ論文が増えていけばいくほど、疫学という学問の重要性は際立ってきていると思います。

米国CDCでは1997年にNational Office of Public Health Genomicsを創設するなどゲノム情報に対する疫学的アプローチの重要性を指摘しており、世界各国のゲノム疫学研究者の協力と

情報交換を目的にHuGENetと呼ばれる組織を立ち上げ、ヒトゲノムに関する疫学情報をHuGE Reviewという形式でシステマティックにレビューしていく作業を開始しています。Dr. John IoannidisやDr. Muin Khouryといった疫学者の意見が強く反映されたこのレビュー形式はThe HuGENet HuGE Review Handbookとしてその手順が厳格に規定されており、今後質の高い総説論文が増えることによって雑多なゲノム研究成果の中から、真に有用な遺伝子多型に関する情報が明らかになってくるものと考えられ、ゲノム科学に疫学が必要とされていることの証左の一端であるかと思えます。

ゲノム研究は世界中で大規模な予算を消費しながら日々進歩しており、デ

ザインとしては洗練されているとは言えないものの強力なGWAS (Genome Wide Association Study) と呼ばれる絨毯爆撃の成果も出始め、各種データベースも整備されてきています。こうして得られた貴重な情報を予防医学に応用していくためにも、GWASの成果をもとに個別的な予防介入研究をデザインして質の高い疫学研究を実施し、実際の社会で本当に役に立つかどうかを判断しうるようなエビデンスを積み重ね、公衆衛生の向上に役立てていければと考えています。

最後になりましたが、ご指導いただきました多くの先生方に感謝するとともに、一緒に研究を進めてきた院生さんやポストクの先生方、コメディカルの方々に深くお礼申し上げます。また

日本疫学会若手の会の世話人・代表幹事として4期にわたり若手の会を企画・実施してこられたのは若手の会の諸先生方のご協力の賜物であり、関係各位には大変感謝しております。ありがとうございました。



学会報告

国際疫学会西太平洋地域学術会議 兼 第20回日本疫学会学術総会を終えて

組織委員会委員長 三浦 宜彦 (埼玉県立大学)

2010年1月9日(土)、10日(日)に埼玉県立大学におきまして、国際疫学会西太平洋地域学術会議 兼 第20回日本疫学会学術総会を開催いたしました。皆様のおかげをもちまして、参加者数は前日からの関連行事を含めて約700人、演題数は海外22カ国から54題、国内から277題の計331題とこれまでに多くのご参加をいただき、滞りなく盛大に執り行うことができました。組織委員会委員一同心より感謝申し上げます。

その概要について、関連行事を含めプログラムに沿ってご紹介いたします。

学術総会前日1月8日(金)に開催しました第17回疫学セミナーは「関連構造を考慮した疫学データ分析の理論と実践」のテーマで、コーディネーターをお願いした国立健康・栄養研究所国際

産学連携センター長の西信雄先生のイントロダクションに続いて、山口拓洋先生(東京大学大学院)に統計学的解説をしていただきました。その後、村上義孝先生(滋賀医科大学)の司会で、相田潤先生(東北大学大学院)と日時弘仁先生(東北大学大学院)に、それぞれマルチレベル分析と繰り返し測定データの分析の実例をご紹介いただきました。全体的に高度な内容であったにもかかわらず、当初の定員を大幅に上回る約171名が真剣に聞き入り、活発な質疑が行われました。

それに引き続いて開催された疫学の未来を語る若手の会には66名が参加され、宮木幸一先生(国際医療センター)の「アジアの公衆衛生大学院(School of Public Health: SPH)」と題した報告や、若手研究者の留学経験の紹介がありました。

また、同日には、県民公開講座「脳卒中や心臓病にならない暮らし」を日本疫学会と埼玉県立大学が共催し、中高年の県民49人の参加をいただきました。本学の萱場一則教授(組織委員会事務局長)が、食事や身体活動の改善と健康増進に関する方法論を解説し、禁煙の大切さを強調した講演を行いました。

学術総会においては、3つの特別講演と2つのシンポジウムを企画し、一般演題も、口演発表67題、ポスター発表264題と多くの発表をいただき、使用言語を英語・日本語としたにも拘わらず、その約85%の演題が英語の発表となりました。

学術総会初日の9日(土)の開会式ではNeil Pearce国際疫学会理事長、児玉和紀日本疫学会理事長(当時)に加え、北京大学公衆衛生大学院院長のHu

Yong-Hua教授よりご祝辞をいただきました。

次に、1つ目の特別講演として、Neil Pearce教授 (Massey University, New Zealand) に「Epidemiology in a changing world」と題した講演をしていただきました。その後、一般口演、ポスターセッション、学会長講演と続き、1つ目のシンポジウム「Epidemiological Evidence for Disease Control and Community Health Promotion」が荒尾孝教授 (早稲田大学) の座長のもとに、中国、韓国からのシンポジストを交えて開催されました。地域の健康増進に関する疫学研究について国内外の事例を踏まえた活発な討論が行われました。

また、これと並行して、日本疫学会と韓国疫学会の交流事業である第7回日韓疫学セミナーを兎玉和紀先生 (放射線影響研究所)、中村好一教授 (自治医科大学) およびWon-Chul Lee教授 (Korea Society of Epidemiology) の座長のもとで開催いたしました。予想以上の参加があり、政府統計の活用について、議論が盛り上がりました。

初日最後のプログラムは2つ目の特別講演「THE 2009 H1N1 INFLUENZA PANDEMIC: How Japan has Responded So Far and the Lessons Learned」で、WHO西太平洋地域名誉事務局長の尾身茂教授 (自治医科大学) に、現在流行している新型インフルエンザの最新情報についてご講演いただきました。

その日の夕刻には、恒例の懇親会を

本学学生食堂におきまして、本学教員、学生のもてなしで開催し、定員120名を上回る150名のご参加をいただきました。埼玉県内10歳の酒造会社の協賛による地酒コーナーがご好評をいただいたようです。

10日(日)は、評議員会、総会、若手研究者奨励賞受賞講演と続き、3つ目の特別講演として、Siyan Zhan教授 (Peking University, China) に「Epidemiology of chronic disease in China」と題して、中華人民共和国の慢性疾患の実態をご紹介していただきました。

午後のポスターセッションに続き、2つ目のシンポジウムとして、日本疫学会学術委員会・理事会企画による「ヘルスサービス研究」が、中山健夫教授 (京都大学) および尾島俊之教授 (浜松医科大学) の座長のもとで開催されました。診断群分類 (DPC) を用いた今後の研究の広がり、医療の質や経済性に関する研究の状況、介護保険制度設計における研究の方法論、米国における状況等の報告が行われました。総合討論では、どのような立場で何を目的に研究を行うかが重要であるなどの議論が行われ、また疫学者が関与すべきヘルスサービス研究の課題が数多くあることが確認されました。

このシンポジウムと並行して、リハビリ担当者や保健師などコメディカルを対象とした特別公開講座「日常の臨床をどのようにまとめるか?—コメディカルのための臨床に役立つ疫学—」が開催されました。国立がんセンターの山本精一郎、溝田友里、自治医科大

学の石川鎮清、竹島太郎の各先生を講師とチュータに迎え、講演とグループワーク形式で講習が行われました。日本全国から様々な職種の70名の方が参加され、3時間にわたる熱心な討論が行われました。

以上のように盛りだくさんのプログラムを用意したため、非常に窮屈な進行となってしまったことは申し訳なく存じ、あらためてお詫び申し上げます。

今回の学術総会は、これを機に埼玉県立大学を知っていただきたいと考え、大学で開催することといたしました。センター試験、学内期末試験を避けるため、会期を新年早々とせざるを得ませんでした。そのため参加者が少なくなるのではと危惧いたしました。が、はからずも多くのご参加をいただき、大任を果たせたと安堵しております。

最後に、皆様のご支援、ご協力に重ねて心から感謝申し上げます。



第15回「疫学の未来を語る若手の集い」の報告

小谷 和彦 (自治医科大学)

第15回「疫学の未来を語る若手の集い」(以下、若手の会)は、平成22年1月8日の午後6時から8時まで、埼

玉県立大学の講堂において、全国から70名弱の参加を得て開催されました。若手の会の世話人の一人として、この

会の様子を報告させていただきます。

今回は、会員から、世界に目を向けるような企画が要望されていたことを踏まえて、「世界にはばたく若手をめざして」をキャッチフレーズに、世話人会で準備を進めていきました。テーマとして、「アジアにおける公衆衛生

大学院（School of Public Health : SPH）についての現況’ならびに‘海外留学の秘訣’の2点を選定し、最近、海外で見聞を広められた若手の先生方に演者をお願いすることとなりました。

最初に、宮木幸一先生（国際医療センター）から、「アジアのSPH」と題して講演をいただきました。特に中国の首都医科大学におけるSPHの状況が示されました。同大学のSPHには学生数（400人弱）が多いことに会場の参加者は圧倒されていました。中国では、近年、82の医科大学の多くにSPHがある（わが国の京都大学のSPH開設時期と同じころから開設された）とのことで、現在、初期の卒業生（学士を含む）が教職をはじめとするキャリアパスを確立中とのことでした。研究分野は日本とよく似ているけれど、その就職率は95%と高く、公衆衛生の専門家の活躍する場所が日本より多いかもしれないという演者からのコメントで締められました。

次いで、「ここが知りたい、若手の海外留学」と題して、3名の先生方から実体験を伺いました。近藤尚己先生（山梨大学）は、2006～2009年にハーバード大学において社会疫学を学ばれた話をされました。博士課程を修了後、留学資金を獲得し、リサーチフェローとして分析研究を中心とした生活の様子は具体的で、留学中の生活費の内情も明かしていただきました。指導者との関係では、上司へのコンタクトの程度と成果の生産性がともに高いことは重要であるというメッセージをいただきました。

白井こころ先生（琉球大学）は、1998～2000年にロンドン大学、2003～2004年（短期）にオックスフォード大学、さらに2004～2005年にミシガン大学において、修士後の博士号取得のための留学とフェローとしての研究のための留学の経験に関して話をされました。フルブライト奨学金をはじめとし



左から村上先生、近藤先生、白井先生、二宮先生、宮木先生

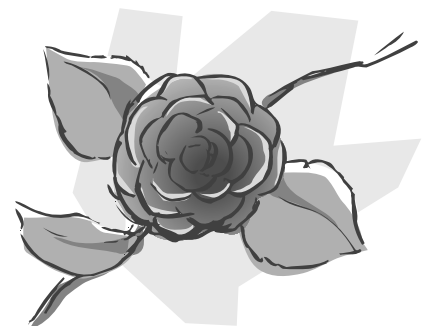
ていくつかの留学資金を獲得しておられ、その長短所を明かしていただきました。受け入れ機関へのアプライの方法や英米のコースワークの異同（英国は米国より短く、1年でマスターコース修了）などの話は複数の留学経験の比較に基づいており、示唆に富みました。

最後に、二宮利治先生（九州大学）は、2006～2009年にシドニー大学において、臨床研究を勉強された話をされました。博士課程修了後、臨床現場を経てからの留学で、前のお二人の先生方とは違った過程であることはまた参考になりました。留学前準備、特に英語の勉強について、また、留学後の住宅、家族の生活、保険のことについてご自分の体験を話していただきました。人脈づくりを強く勧められたのが印象的でした。

参加者のアンケートを通じて、全体を通して、留学の準備や留学後の生活などの実際に役立つ情報を得られて非常に有意義であったという声が多数寄せられていました。演者を快く引き受けてくださった先生方に、この場をお借りして、あらためて感謝を申し上げます。

この盛り上がりそのまま、会員の懇親は夜遅くまで続きました。この懇親会も、全国の若手交流の場として良い機

会となっています。今回のような集会にとどまらず、若手の会では、普段はメーリングリストを通じての意見交換を行っています。参加資格は、「自称若手疫学者で、日本疫学会会員であること」ですので、ご希望の方は若手の会のホームページ（<http://www.eki-waka.umin.jp/>）から是非アクセスして下さい。最後に、次回の日本疫学会学術総会は札幌（北海道立道民活動センター）で開催されます。次回の若手の会でも会員が関心の持てるテーマを企画したいと思いますので、ご意見・ご要望を忌憚なくお寄せ下さい。そして、多くの方々とお会いできますことを楽しみにしています。



学会案内

第21回日中韓産業保健学術集談会

会 期：2010年6月10日(木)～12日(土)

会 場：栃木県総合文化センター（宇都宮市）

メインテーマ：全ての働く人々への産業保健サービス提供 - Extending Occupational Health Services to All Workers -

学会長：武藤孝司 獨協医科大学教授

日本側代表：大久保利晃（財放射線影響研究所 理事長／元・産業医科大学 学長）

事務局長：東 敏昭 産業医科大学 産業生態科学研究所 所長

申し込み・問い合わせ：産業医科大学産業生態科学研究所 作業病態学研究室

〒807-8555 北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1

TEL：093-691-7470 / FAX：093-601-2667

URL：http://wshiivx.med.uoeh-u.ac.jp/kjc/index.html E-mail：kjc@inbox.med.uoeh-u.ac.jp

第32回国際がん登録協議会学術総会（IACR2010）のご案内

IACR2010は、がん登録、がん疫学・統計、がん対策関係者にとって、最新の情報を交換し、親交を深めことができる貴重な機会です。皆様のご参加をお待ちしています。

会期：2010年10月12日(火)～14日(木)

会場：横浜赤レンガ倉庫1号館（横浜市）

メインテーマ：がん登録と社会との調和

サブテーマ：1. がん対策とがん登録

2. がん医療の質とアウトカム研究

3. がん登録資料の最新分析手法

4. リスク評価のためのがん登録

関連イベント：生存解析研修コース

大会長：廣橋説雄 国立がんセンター総長

演題投稿締切：2010年4月30日

オンライン登録締切：2010年9月10日

URL：http://www.cancerinfo.jp/iacr2010/

問い合わせ先：IACR2010事務局

(E-mail：iacr32@accessbrain.co.jp)



第21回日本疫学会学術総会のご案内

日 程：2011年（平成23年）1月21日(金)・22日(土)

会 場：かでの2・7（北海道立道民活動センター）

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目

TEL 011-204-5100 http://www.kaderu27.or.jp

テーマ：クオリティの高い疫学研究に基づく疾病予防・健康増進を目指して

学会長：森 満（札幌医科大学医学部公衆衛生学講座教授）

本学術総会は広い分野にわたって質の高い疫学研究に接する機会となることから、上記テーマのもと、がん、循環器疾患、感染症、高齢者福祉、特定疾患・難病などのさまざまな分野におけるクオリティの高い疫学研究を実施するた

めの方向性を示していただけるような特別講演やシンポジウムを企画しております。

1月下旬の札幌は寒さや積雪など厳しい季節ではありますが、多くの方のご参加をお待ちしております。

事務局：大西 浩文

札幌医科大学医学部公衆衛生学講座

〒060-8556 札幌市中央区南1条西17丁目

TEL：011-611-2111 FAX：011-641-8101

E-mail：jea21st@sapmed.ac.jp

学会ホームページ：

http://www.sapmed.ac.jp/jea21st/

委 員 会 か ら の お 知 ら せ

日本人類遺伝学会のGMRC制度が利用できるようになりました

GMRC制度小委員会委員

2008年度に日本人類遺伝学会からゲノム・メディカルリサーチコーディネーター（GMRC）制度に関する連携の提案があり、日本疫学会ではGMRC制度小委員会（委員長：浜島信之、委員：岡山明、玉腰暁子）を設置し検討を行ってまいりました。その結果、2009年10月23日の日本疫学会理事会で連携が承認され、2009年12月1日に両理事長の間で「日本人類遺伝学会GMRC（Genome Medical Research Coordinator）制度における日本人類遺伝学会と日本疫学会との連携に係る協定書」が締結されましたので、その内容をご報告致します。

日本人類遺伝学会ではGMRCを、「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」における「インフォームド・コンセント履行補助者」の役割を果たす専門職と位置付けており、このGMRCを養成認定するのが日本人類遺伝学会のGMRC制度です。今回の協定締結により、

1. 日本疫学会の会員は日本人類遺伝学会の会員と同様に認定試験及び更新制度を利用できます。
2. 日本疫学会の会員であっても、GMRC取得希望者の受講料、受験料は日本人類遺伝学会会員と同額で

す。GMRC制度委員会に書類の提出と手数料の支払いが必要です。

3. 5年毎に認定更新が必要です。

なお、講義と認定は日本人類遺伝学会が実施しますが、日本疫学会からも講師が派遣され、GMRC制度委員会にも日本疫学会の代表が委員に加わっています。また、協定の期間は5年間でいずれかからの申し出がなければ自動的に5年間繰り返し延長されます。

応募資格はGMRC制度規則第3条に以下のように規定されています。

次の各号に掲げるすべてに該当し、GMRC制度委員会の実施するGMRC講習会（以下「講習会」という。）を受講し、GMRC認定試験（以下「認定試験」という。）に合格しなければなりません。

- (1) 専門学校卒業以上（及びそれに準じる程度）の学歴のある者。
- (2) GMRC制度委員会が認定した講習会において所定の研修を受け、認定試験に合格した者。
- (3) GMRC到達目標（以下「到達目標」という。）に記載されている能力を有する者。到達目標については別に定める。

認定試験は毎年1回実施され、この

試験に合格し、所定の認定手数料を納入した者が日本人類遺伝学会理事長によりGMRCに認定されます。詳細は、日本人類遺伝学会のホームページ <http://jshg.jp/qualifications/gmrc.html> をご覧ください。

なお、制度利用にあたっては次の点について理解をしていただくようお願いいたします。「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針（平成20年12月1日一部改正）」では、「インフォームド・コンセントの履行補助者に関する細則」に「試料等の提供者又は代諾者等から同意を受けることを含めて行わせる場合は、履行補助者は、原則として、医師、薬剤師等、刑法第134条、国家公務員法第100条及びその他の法律により業務上知り得た秘密の漏えいを禁じられている者が行う場合に限る。」とあります。このGMRC制度では、この要件を満たさない者についても資格が付与されますが、この資格により「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」でのインフォームド・コンセントの履行補助者となりうるかどうかについては明確になっていないわけではありません。

Journal of Epidemiologyの掲載料徴収

Journal of Epidemiology編集委員長 祖父江 友孝

2008年10月のオンライン投稿査読システム（Manuscript Central）の導入以降、投稿件数が順調に増加しており、2009年度は2008年度の1.6倍となる229

編（国内113編、海外116編）のご投稿をいただきました。投稿件数の増加にあわせて1号あたりの掲載論文数も増加しており、2010年刊行の第20巻では

14編が掲載される号も出てくる見込みです。このように、Journal of Epidemiologyが発展しておりますのも、会員の皆様のご協力の賜物と厚く

感謝申し上げます。

一方で、掲載論文数の増加は英文校正費や印刷費など経費の増加にもつながっており、学会の財政負担を軽減すべく、様々な方策を検討して参りました。その中で、1月10日(日)の第20回日本疫学会会務総会で決定いたしましたのが、掲載料の徴収です。具体的には、印刷された掲載論文の3ページ目まで

は無料、4ページ目以降は1ページにつき5,000円徴収するというものです。日本疫学会会員については5,000円引きということで、4ページ目まで無料、5ページ目以降は1ページにつき5,000円徴収ということになります。受益者負担の観点からも、掲載料徴収にご理解をいただきますようお願いいたします。時期としては、本年4月以

降に掲載され採択された論文より徴収開始を予定しています。

現編集委員会は、任期終了の2010年12月末まで約9か月となりました。より良い雑誌を作るべく、一同最後まで頑張つて参りますので、今後ともご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

日本疫学会新役員決定

任期満了に伴う理事長・理事選挙等により、以下のよう
に新役員が決定しました。(順不同、敬称略、任期：2010
年1月総会～2013年1月総会)

【理事長】

秋葉澄伯 (鹿児島大学大学院)

【理事】

辻 一郎 (東北大学大学院)
深尾 彰 (山形大学大学院)
中村好一 (自治医科大学)
山縣然太郎 (山梨大学大学院)
三浦宜彦 (埼玉県立大学)
祖父江友孝 (国立がんセンター)
津金昌一郎 (国立がんセンター)
丸井英二 (順天堂大学)
浜島信之 (名古屋大学大学院)
橋本修二 (藤田保健衛生大学)
磯 博康 (大阪大学大学院)
中山健夫 (京都大学大学院)
黒沢洋一 (鳥取大学)
田中恵太郎 (佐賀大学)

【指名理事】

北村明彦 (大阪府立健康科学センター)
田中英夫 (愛知県がんセンター)
永田知里 (岐阜大学大学院)
新田裕史 (国立環境研究所)
森 満 (札幌医科大学)

【監事】

西 信雄 (国立健康・栄養研究所)
溝上哲也 (国立国際医療センター)

なお、理事会における具体的な役員体制は以下の通りです。

理事長代行理事：丸井英二
財務担当理事：橋本修二
庶務担当理事：中山健夫
名誉会員推薦担当理事・

功労賞受賞者推薦担当理事の長：三浦宜彦
奨励賞選考委員長：田中恵太郎
国際交流委員長：中村好一
ニュースレター担当理事：津金昌一郎
倫理問題検討委員長：山縣然太郎
Journal of Epidemiology編集委員会委員長：
祖父江友孝 (2008年1月～2010年12月)
倫理審査委員会委員長

東日本：山口直人 (2009年1月～2012年1月)
西日本：竹下達也 (2009年1月～2012年1月)



事務局だより

(1) 事務局の移転

2010年度から、事務局が財放射線影響研究所疫学部から鹿児島大学大学院医歯学総合研究科疫学・予防医学に移転しました。

ご意見、お問い合わせ、入会手続依頼等のご連絡は、下記新事務局までお願い申し上げます。

【日本疫学会(新事務局)】

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科疫学・予防医学 気付

〒890-8544

鹿児島県鹿児島市桜ヶ丘 8 丁目35- 1

TEL/FAX : 099-275-0363

E-mail : jea@m3.kufm.kagoshima-u.ac.jp

HP : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jea/>

[index.html](http://wwwsoc.nii.ac.jp/jea/index.html) (従来通り)

郵便振替口座 : 01740-3-53840

加入者名 : 日本疫学会

事務局長 : 郡山 千早

(2) 2010年度会費納入のお願い

2010年度の会費納入に関するご案内を2月中旬に会員の皆様へ発送いたしました。会費納入につきましては、速

やかにお支払いいただきますようお願い申し上げます。なお、年会費を二重にお支払いいただいた場合、郵送料を差し引いて現金書留にてご返金いたします。事務局では翌年度に会費を回すということを行っておりませんので、あらかじめご了承ください。

(3) 日本疫学会奨励賞募集要項

日本疫学会奨励賞に関する細則にもとづき、以下を満たす受賞者の推薦をお待ちしています。(詳細は細則をご覧ください)

・本会会員のうち、優れた疫学的研究を行い、その成果を日本疫学会、Journal of Epidemiologyおよびその他の疫学関連学会や専門雑誌に発表し、なお将来の研究の発展を期待する者(原則として個人)

・受賞者は継続3年以上の会員歴を持つ本学会会員に限られ、受賞の暦年度の募集締切日において満45歳未満の者

なお、推薦書の提出期限は5月1日～6月30日で、原則として評議員からご推薦いただくこととなっております

す。日本疫学会会員名簿・日本疫学会諸規則集(2008年10月発行)にあります推薦書様式をもとに、候補者をご推薦くださいますよう、お願い申し上げます。

(4) 日本疫学会通信

事務局から会員の皆様へ日本疫学会通信を発行しております。この案内がご不要な場合やメールアドレスの変更、訂正などが必要な場合、事務局までご連絡ください。

(5) 日本疫学会会員数

日本疫学会会員数(2010年1月18日現在)は1,517名です。

会員の内訳は、名誉会員27名、評議員197名、普通会員1,293名

(6) ニュースレター郵送の中止

平成18年9月15日発行のNo.28からニュースレターの郵送が復活していましたが、経費削減のため次号から再び郵送を中止いたします。皆様にはご不便をおかけしますが、なにとぞご了承のほどよろしくようお願い申し上げます。

編集後記

現編集委員会としてお届けするニュースレターは今号が最後となります。会員皆様からの温かいご支援のおかげをもちまして3年間無事にニュースレターが発行できたことを、嬉しく思うと同時に、心より感謝申し上げます。この3年間のニュースレターでは、経験豊富な先生方(編集委員会では大御所とあえて呼ばせていただきました)、新進気鋭の現教授世代の先生方、そして若手疫学者、という3本柱の構成をとってきました。したがって、幅広い視点からの記事がご提供でき、学術的視点からだけではなく、会員相互の交流というニュースレターの趣旨からしても、会員の皆様にお楽しみいただけたのではないかと編集委員会一同、自負しております。

す。次号以降、新たな編集委員会となりますが、きっと新機軸が盛り込まれるものと楽しみにしております。今後とも、疫学会およびニュースレターをよろしく願い申し上げます。(藤野)

次号から新しい編集体制での発行となります。3年間、ありがとうございました。(尾島、大竹、大西、北畠、延原、藤野、星、若林、西、岩見、高橋、三浦)

編集委員会ではニュースレターへのご意見・ご感想や、投稿をお待ちしています。詳しくは日本疫学会ニュースレターのホームページをご覧ください。